

夏目漱石とクラシック音楽

(第16回)

ドヴォルザークとユンケル

音楽学者・元東京藝術大学特任教授
瀧井 敬子

札幌市内を走る路面電車の南端の終点に、私が通う北海道学芸大学付属札幌小学校はあった。田舎の風景が色濃く残り、冬は雪野原になって、道もわからなくなってしまう。西側の藻岩山の原始林は、自然の恐ろしさと楽しさを教えてくれた。下校時間の音楽は、ドヴォルザークの「家路」であった。この曲が流れると、校庭で遊んでいた私たちは、長い紐のついた定期券入れを急いで首からぶら下げ、停車場に向かって走る。皆、バラバラの音程で「遠き山に日は落ちて…」と歌いながら、「発車しないで！」と運転手さんに手を振る。

「家路」の旋律は、チェコ人作曲家ドヴォルザーク(1841-1904)の交響曲「新世界より」の第二楽章の主旋律である。高校生になって初めてオーケストラで聴いたとき、この旋律がイングリッシュ・ホルン1本で演奏されていることを知った。周知のように、交響曲「新世界より」の「新世界」とは、アメリカのことである。ドヴォルザークはこの曲をアメリカで作曲した。富豪ジャネット・サーバー夫人からナショナル音楽院の院長になってほしいと頼まれ、しかも1893年のコロンプスのアメリカ大陸到達400周年を祝う式典に間に合うようきてほしいと懇願され、彼は大西洋を渡ることになったのである。当時のアメリカは、クラシック音楽の分野ではまだ新興国であった。

「家路」を口ずさむと、私の頭の中にはアウグ

スト・ユンケル(1868-1944)の名が連想ゲームのように浮び上がってくる。ユンケルはドイツ西部アーヘン近郊に生まれ、ケルンの音楽院卒業後、「ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団」の第一ヴァイオリン奏者となった。しかし、若い彼はその地位に満足することなく夢を求めて、アメリカに渡った。そこで出会ったのが、先輩ドイツ人セオドア・トーマス(1835-1905)であった。セオドアは新天地アメリカで成功して、大都市にオーケストラを作り、指揮者として大活躍していた。アメリカ大陸到達400周年を記念した「シカゴ・コロンプス万国博覧会」の1893年には、90人位だったシカゴのオーケストラに大補強を加え、大編成にするのがトーマスの野心であった。ドイツから優秀な音楽家をスカウトする役目は、ユンケルに託された。ユンケルは一旦故国に帰り、数ヶ月かけてスカウトに成功。そしてプレーメンから、ニューヨーク行きの船に乗った。その同じ船に、偶然にもドヴォルザークが乗り合わせていたのである。二人は乗客たちに請われて、船上で室内楽コンサートを行った。

トーマスが作ったシカゴのオーケストラは、のちに名門「シカゴ交響楽団」となった。一方、ユンケルは次なる新天地を極東に求め、明治日本にやってきた。そして、わが国のオーケストラの父となった。